

伊勢志摩の海女

海女は、呼吸装置を使わず海中から様々な水産物を採集する女性素潜り漁師です。海女の伝統は日本と韓国のみが存在し、「アマ（海女）」（韓国語では「ヘニョ」）という語は「海の女」を意味します。文献に海女が登場するのは8世紀になってからであるものの、一部の学者は、海女はおおよそ2,000年前から存在していたと推定しています。日本には他にも海女が活躍している海岸部がありますが、伊勢志摩国立公園は国内最大の海女人口を抱えています。

海女は、若いころ（早い場合は12歳）から、先輩の海女に潜水の仕方や呼吸法、さまざまな種類の海の生物の見分け方などを教わります。毎回大抵おおよそ1分間の潜水中、海女は最大20メートルの深さまで潜り、可能な限り多くのアワビや貝類、海藻類を集めます。スピードと効率が最も重要とされるこの素潜り漁を、海女たちは「50秒の勝負」と呼んでいます。

海女の潜水法には「徒人（かちど）」と「舟人（ふなど）」の2種類があります。「徒人」では、網のかごを水面に浮かべ、ロープをとりつけます。海女はこのロープを自分の腰に巻き、収穫したものをかごに入れます。「舟人」は一般的に夫婦で行われます。夫は船で待機し、海女はおもりを使って素早く潜ります。水面に戻る時は、海女は船上の夫に合図を送り、夫は滑車で海女を引き上げます。

海女は伊勢志摩の生活と文化にとって欠かせない存在です。近年海女の人口は減少しているものの、鳥羽市立海の博物館とはじめとするいくつかの施設は、未来の世代のために海女の伝統の保存に取り組んでいます。